

令和 3 年 6 月 16 日現在

機関番号：32688

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K12297

研究課題名(和文) 近世中期における悪所の俳諧 - 其角・江戸座を媒体とする基礎的研究 -

研究課題名(英文) Haikai poetry in the Early Modern Pleasure Quarters and Theatre Districts
-Kikaku and the Edoza Haikai Circle

研究代表者

稲葉 有祐 (Inaba, Yusuke)

和光大学・表現学部・准教授

研究者番号：90649534

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：申請者は、元禄期から宝暦期までを中心に、江戸文化の発信地である悪所(遊廓・芝居町)で興じられた俳諧の実態について解明することを目的として、特に、江戸俳諧を強力に牽引した蕉門俳人、宝井其角とその門流の活動に着目して研究を展開した。研究を通じて、其角門流の交流圏と遊女・役者との密接な繋がり、悪所の描かれ方、遊廓における俳諧の機能や芝居を題材とする句作方法など、これまで注目されることのなかった都市俳諧の特質の数々が明らかとなった。以上のように、今後の江戸文化・江戸俳諧研究を推進する上で非常に有意義な研究成果を得られている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

芭蕉を中心に研究が進められていた俳諧の分野において、これまで考究の手薄であった言語遊戯的で機智性の強い江戸の都会派の実態を、特に悪所での活動に焦点化して調査することで、遊廓・芝居町での社交の具、また、歌舞伎など他ジャンルとの連携など、俳諧の多角的な側面を捉え直し、江戸文化総体の中に位置付けるという視点と可能性を提示した。また、諸文献を調査し、遊女句の収集、役者の俳号(表徳)のデータベース化を行った。

研究成果の概要(英文)：The aim of my research is to clarify the actual situation of haikai poetry as performed in the entertainment districts such as the theaters and licensed quarters. These districts, also called the Bad Places (Akusho), are the origins of the urban Edo culture, blossoming between the Genroku and the Horeki period. There are many hitherto unknown characteristics of urban haiku which this research points to. For example, there is a close connection between the poet Takarai Kikaku and his disciples' interactions, and their connections to prostitutes and Kabuki actors, which show the function of haikai poetry in the entertainment districts, both in its social function and in its choice of source material. This research has the potential to further promote future research on Edo culture and Edo haikai poetry.

研究分野：日本近世文学・俳文学

キーワード：宝井其角 市川団十郎 新吉原遊廓 江戸座俳諧 歌舞伎

1. 研究開始当初の背景

江戸文化を考えるにあたり、悪所がいかに大きな影響力を持ち、重要な役割を担ってきたかは、例えば浮世絵における美人画・役者絵の普及と隆盛を見るだけでも理解出来る。江戸のファッション・文化の最先端を開いたのが新吉原遊廓であり、芝居町である。勿論、悪所に関しては、社会学・歴史学・民俗学、また文学(戯作研究・歌舞伎研究)の各領域から研究がなされているが、従来の調査の多くは遊廓と歌舞伎(芝居町)とを個別に扱っているため、それらを有機的に結びつける仲介者、文化の伝播者の存在について具体的な視点を十分に持ち得ていなかったのではないかと推察される。

そこで、その媒体として俳諧という文芸の存在を提起することにした。ここでいう俳諧とは、主に、点者に採点させ、点数の多寡を競う遊戯的な俳諧、点取俳諧や雑俳の前句付を指す。申請者は、これまで、「さび」・「かるみ」といった所謂蕉風とは別の、「伊達」な風趣を持つ都会派俳諧について、方法・文化背景・宗匠組織と言った観点から研究してきた。そうした成果の延長として悪所に焦点をあて、江戸俳諧との関連・実態について、俳書の入集状況や評判記等をもとに解明することに思い至った。

俳諧を考える上でも悪所との繋がりは極めて重要である。江戸俳人と遊廓関係者・歌舞伎役者との交流は密であり、特に本研究で中心人物として扱う蕉門の宝井其角は悪所の内部に深く入り込んでいる。悪所を調査することで、得られる成果は少なくないと考えられる。ただし、研究上、其角は極めて不遇な扱いを受けてきたという経緯があった。それは言語遊戯的で芭蕉とは異なる作風であり、また、近代俳句観(子規の客観写生)とも相違することに起因した。悪所を活動拠点としたことにより、近代的な道德観から一方的に「幫間」のレッテルが貼られることもあった。そのため、門流からなる江戸座とともに、研究の俎上にあがることは非常に少なかったのだが、文学史的に見ても、其角門流の系譜から与謝蕪村が輩出され、江戸座の点取と前句付から新興文芸の川柳が派生するのであり、其角流の都会派俳諧は重要な位置にあると考えられる。悪所の研究を通じて、其角及び江戸座俳諧について再検討し、再評価を試みなくては、文学史的・文化史的に大きな欠落を生み出すのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究は悪所文化を俳諧という視座から体系的に俯瞰し捉え直すことを目的とする。それは同時に、従来の芭蕉中心主義といった史観から離れ、江戸文化に華を咲かせた、都市における新たな俳諧史を構築することを意味する。対象とする其角系の都会派俳諧は難解とされ、十分に調査の進展していない分野であるが、本研究では、これまで個別に行われていた遊廓研究・歌舞伎研究をも視野に入れながら、悪所を舞台とした(或いは舞台裏を明らかにする)俳諧について複合的・総合的に調査・分析し、その具体の解明する。悪所において、遊客や役者はともに俳諧を嗜み、俳号(表徳)を持つことをステータスとしていた。遊女評判記や吉原細見を見れば明らかのように、遊廓には俳諧師が常住しており、俳諧は身につけるべき遊芸の「六芸」の一つと位置付けられている。また、悪所の趨勢や組織には景気や改革など、社会的な動向も関係する。歴史的視点・同時代性に留意し、体系的に悪所文化・俳諧活動を把握することで、細分化した江戸文芸・江戸文化研究に対する新たな礎石を築くことを目指す。

3. 研究の方法

上記の目的の達成を目指すために、次に挙げる3点の方法を柱として研究を進めた。

- 1、俳書の入集状況調査
- 2、主要な人物に関する追跡調査(追善集を手がかりに)
- 3、江戸俳諧のネットワークから見る悪所文化の分析

1については、其角は遊女評判記『吉原源氏五十四君』(貞享4年成)を執筆、遊廓内にも結城屋来示ほか数多の門弟を持っており、一方、多くの元禄期の役者とも親交があった。そこで、其角の編著及び周辺俳人、其角門を中心とする江戸座の俳書を調査し、詞書・肩書や作者の配列順などをもとに、遊廓・芝居関係者の入集状況の確認を進めた。中には役者間による襲号という問題も含まれてくるが、役者の俳号に関しては『歌舞伎評判記集成』・『新訂増補歌舞伎人名事典』(日外アソシエーツ)等を基礎文献として可能な限り網羅的に調査し、体系的に整理した。俳書の調査は、一つの目安として、島田筑波氏の「江戸座俳書年表」(1931～1933)に記載された享保元年から宝暦14年までの江戸座俳書280弱がある。また、『関東俳諧叢書』第20巻(2000)所収、関東俳諧年表に記載されるもののうち、初の蕉門撰集である其角編『みなしぐり』が刊行された天和3年から宝暦14年に至る間の1300強より、選出して行った。

2は、1を進める中で、キイとなる人物についての追跡調査を行った。また、追善集には、遊女・役者の伝記・逸話の記されることがあり、入集者による交友関係の推定など、貴重な情報を含んでいる可能性が高い。役者の追善俳諧集の嚆矢は、大和屋甚兵衛追善『梓』(元禄17年刊)とされ、宝永5年には中村七三郎追善『のこる露』も刊行されている。また、吉原遊廓においては、享保13年に名妓玉菊の三回忌集が江戸座俳人によって出されている。主要な人物と江戸座俳人の動向を追うことで、悪所文化の具体を把握した。

3は、1・2の調査を礎に社会状況等を視野に入れた注釈作業を加えて、俳諧・遊廓・歌舞伎の影響関係とその可能性について調査した。

なお、調査対象となる期間について元禄期(天和・貞享を含む)から宝暦期までと設定したのは、元禄期に江戸俳諧が悪所文化と密接に繋がりを持ち始めること、歌舞伎においては寛延元年に一大ヒット作『仮名手本忠臣蔵』が初演され、同時期に奥村政信による発句入り役者絵が発表されて人気を博したこと、宝暦期に入り新吉原遊廓で太夫がいなくなるなど、また点取俳諧が大流行、高点付句集が刊行され、江戸座の派閥・組織が整備されていくことなど、それぞれの画期を考慮してのものである。

平成30年度は元禄・享保期における其角・江戸座系俳書・一枚摺を中心に、遊廓・芝居関係者の入集状況を調査し、データベース化を行った。その際、俳書編纂に関わっている俳人の動向についても目配りし、俳諧を基としたネットワークの解明を目指した。そして、評判記・浮世草子・随筆等によって重要視される人物の追跡調査をし、その活動実態を明らかにした。随時、主要な作品に対する注釈作業を進めた。平成31(令和1)年度は前年に引き続き、対象を享保期から寛延期までへと広げて調査を行った。令和2年度には、宝暦期へと調査範囲を広げ、集積したデータを総括した。

遊廓・芝居関連の俳諧資料・江戸座関連の俳諧資料の調査を秋田県立図書館・上田市立図書館花月文庫・京都学歴彩館・公益財団法人柿衛文庫・富山県立図書館志田文庫の他、国会図書館・国文学研究資料館や慶応義塾大学図書館・聖心女子大学図書館・東京大学総合図書館・立教大学図書館・早稲田大学図書館等で行った。

4. 研究成果

悪所で興じられた俳諧の実態を明らかにする本研究の成果について、以下、記述する。

まず、遊廓については、「粋」・「通」といった遊興の美的概念に彩られた虚構の異域と

捉え、そこで俳諧がいかに機能し、何を描き出していくのかということ、其角とその門流の活動を中心として検討した。其角に関しては、遊女との交流、豪商紀伊国屋文左衛門との逸話等をもとに、遊廓・遊興について詠まれた句を調査し、それが次第に説話化していく様相を明らかにした。加えて、補助的な作業として、遊里文芸である洒落本の網羅的な調査を併せて行ったところ、新吉原へと向かう道中や廓内を描写するにあたり、其角句、例えば「闇の夜は吉原ばかり月夜哉」・「京町の猫通ひけり揚屋町」の句等が後世にあっても多々引用されている事実が確認され、その遊廓の文化における影響力の大きさが浮き彫りとなった。

また、遊廓の中には、客とのコミュニケーションツールとして俳諧を積極的に活用している遊女（例えば、仙台高尾や吉田）があり、俳諧の機能・有効性を示す具体的な事例を明示した。また、享保19年の浅草寺裏奥山への桜樹千株寄進を記念した遊女の俳句集『桜かゞみ』を取り上げ、廓内のイベントと俳諧の関係について考察し、さらには、詠まれた作品から、廓外に向ける遊女達のまなざしについて言及した。上記については、説話文学学会シンポジウムで口頭発表の後、『説話文学研究(55)』で論文化している。なお、遊興の場にも通ずるものとして、其角が俳諧における「興」を重視していたことを俳文学会東京例会シンポジウムで指摘し、『日本文学ジャーナル(18)』（2021年6月刊行予定）で論文化している。その他、新吉原のみならず、貞門・談林期及び元禄以降の各所遊里の遊女達の俳諧活動・遊廓に関連する俳人の作品を広く調査し、遊廓における文芸活動の相対化を進めている。

芝居町については、其角と門流の江戸座俳人の活動、特に方法、役者との人的交流、俳書の編集という側面に注目し、その影響・展開について調査・考察した。楽屋にも頻繁に顔を出す其角の交友圏は初代市川団十郎・同中村七三郎・同中村伝九郎をはじめ、非常に広く、密である。本研究では、その活動実態を追うことで、其角が芝居の役柄を題として句作する方法を考案し、それを享保期の二世湖十・貞佐（ともに其角点印の所有者）や門流らが発展させていくことを明らかにした。一方、二代目団十郎にも江戸座の絵俳書流行に影響され、享保15年、父の追善集『父の恩』を刊行するといった動きがある。相互交流が確認されるわけだが、注目されるのは、江戸座俳人の中に、芝居町・楽屋裏に居住する者が少なくないことである。湖十に加え、貞佐門の超波や平砂らも堺町に住む宗匠であったことが分かっている。

寛延4年に「真極上上吉」と評される初代沢村宗十郎も貞佐・超波・平砂の門人で、俳諧に遊んだ役者である。その追善として編まれた『師の恩』（天明8年刊）は、宗十郎が演じた役柄の画を描き、それらを題として諸家が句を詠み、年代順に並べて一代記的な集大成を試みる企画となっており、ここにも役柄を題材として句作するという其角の方法の継承と発展が確認される。同書には演目や上演年、共演者など、俳諧に留まらず、歌舞伎研究にも資する情報が含まれると考えられるが、ただし、編集が杜撰であったことも調査によって明らかとなり、扱いには注意を要することが判明した。なお、故人役者の法名記『名取草』（安永2年刊）には、元禄期の初代市川団十郎・中村七三郎・中村伝九郎の図像に、彼らに纏わる其角句が添えられており、江戸の歌舞伎と俳諧の祖師とがセットになって象徴化されていたことが分かった。上記については早稲田大学国文学会秋季大会において口頭発表を行い、『国文学研究(194)』（2021年6月刊行予定）で論文化している。加え、同稿には、並行して行っていた二代目団十郎・沢村宗十郎・初代中村重助ら芝居関係者達と貞佐の巻いた連句についての注釈（『近世文芸研究と評論(98)』）における成果も取り込んである。

さて、悪所文化を通じて改めて確認されたのは、其角の影響力の大きさと、そのシンボル化であった。また、其角は二代目団十郎を連れて新吉原を訪れるなど、悪所を繋ぐ役割をも果たしている。門流の江戸の俳諧師達の活動を含め、本研究によって、近世中期における悪所の俳諧の特

質と具体とを明示する一つのモデルを提供し得たと考えている。

今後の展望としては、悪所文化と俳諧文芸への考察を深めるとともに、例えば社交の場に通じた江戸留守居役、江戸座のパトロンであった大和郡山藩主、柳沢米翁（多量の観劇日記が残る）の活動といった、武家・大名文化圏との関連性を明らかにし、研究を発展的に進めていく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 稲葉有祐	4. 巻 8
2. 論文標題 江戸座俳諧と角館 - 佐竹北家、明和安永期の活動から -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本文学研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 73-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 佐藤勝明、玉城司、伊藤善隆、服部直子、越後敬子、稲葉有祐	4. 巻 94
2. 論文標題 『四時観』 「名月や」歌仙分析	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 近世文芸研究と評論	6. 最初と最後の頁 71-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 中嶋隆、稲葉有祐、荻原大地、木村有紀子、白鳥敬秀、富永真由、長谷川美菜、晝田葵	4. 巻 95
2. 論文標題 (早稲田大学図書館所蔵 新出資料) 『世渡りや』歌仙注解	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 近世文芸研究と評論	6. 最初と最後の頁 31-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 稲葉有祐、久保彰恒、佐久間光瑞、劉欣佳	4. 巻 98
2. 論文標題 『代々蚕』 「初午や」歌仙注解	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 近世文芸研究と評論	6. 最初と最後の頁 196 - 215
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 稲葉有祐	4. 巻 55
2. 論文標題 異域としての遊廓 - 元禄・享保期の江戸俳諧を視座に -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 説話文学研究	6. 最初と最後の頁 113 - 124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 稲葉有祐	4. 巻 194
2. 論文標題 江戸俳諧と役者 其角・江戸座の交流圏と『師の恩』への展開	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国文学研究	6. 最初と最後の頁 未刊
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 稲葉有祐	4. 巻 18
2. 論文標題 「贈晋涉川先生書」再考 其角と不易流行をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本文学研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 未刊
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 稲葉有祐
2. 発表標題 赤穂浪士と江戸の俳人たち
3. 学会等名 俳文学会東京例会・「忠臣蔵と俳諧・川柳」講演会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 稲葉有祐
2. 発表標題 庄内藩と江戸座俳人得器 『庭中花の歌発句』をめぐる人的交流と文化意識
3. 学会等名 大名文化圏生成のダイナミズムを考える研究集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 稲葉有祐
2. 発表標題 前句付・点取と批評
3. 学会等名 早稲田大学国語教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 稲葉有祐
2. 発表標題 興と俳諧 - 「句兄弟」の思想的背景と研究史上の問題をめくって -
3. 学会等名 俳文学会東京例会7月例会・シンポジウム「芭蕉没後の二潮流再考 - 文学から思想へ、作品から行為へ -」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 稲葉有祐
2. 発表標題 異域 としての遊廓 元禄・享保期の江戸俳諧を視座に
3. 学会等名 説話文学会9月例会・シンポジウム「異域 説話をめぐって」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 稲葉有祐
2. 発表標題 江戸俳諧と役者 其角・江戸座の交流圏と『師の恩』への展開
3. 学会等名 早稲田大学国文学会秋季大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 佐藤勝明（編）、井上敏幸、玉城司、伊藤善隆、鹿島美里、稲葉有祐、真島望	4. 発行年 2021年
2. 出版社 世音社	5. 総ページ数 229-301、415-434（共著）
3. 書名 東風流 宝暦俳書の翻刻と研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>稲葉有祐「筆跡・署名に注目した授業実践の試み - くずし字をより身近に感じるために -」、『和本リテラシーニュース』、4号、8-10、2019</p> <p>稲葉有祐「其角の記憶・追憶・江戸残照」、『好古趣味の歴史 江戸東京からたどる』、2020、176-179</p>

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------